

「天地知る」

本山航大

あらすじ

日本に指名手配制度を作った男が、日本初の指名手配犯だった。明治維新の新政府にて、教育や警察、法律の制度を整え、日本で初めて「民権」を訴えた佐賀藩出身の江藤新平。彼は法の番人でありながら、なぜ指名手配犯となったのか。政敵・大久保利通の視点から、新平の悲劇的な運命をたどる時代劇。

1878年。内務卿の大久保が馬車で通勤していると、道の脇に死んだはずの新平を見る。大久保は「江藤の亡霊が私を殺しに来た」と気絶する。駆けつけた医者に、「私が江藤を殺した」と因縁を語り始める。

青年時代、大久保は父が薩摩藩のお家騒動に敗れて島流しに。その時の生活苦から、強い権力を持つとうと決意する。幕末、西郷隆盛と武力討幕を進めるが「戦意のない慶喜を討つのは反対だ」と新平が横やりを入れてくる。また、大久保の「大坂遷都」も「都は江戸が良い」と否定。大久保は新平の思想に敗れ続ける。

明治維新後、岩倉具視は使節団に新平も推薦するが、大久保が阻止。ただ、使節団が外交上の成果を何も上げられない中、新平は留守政府で初代司法卿となり、力を強めていく。大久保が帰国すると、西郷と新平は朝鮮との外交を迫る。もし西郷の外交が成功すれば、使節団の面子が潰れてしまう。大久保は岩倉と画策し、力技で朝鮮派遣を沈めるのだった。

新平や西郷らは明治政府を去る。その頃、佐賀では政府に不満を持つ志士たちが暴発寸前で、新平はそれを沈めるために帰佐。しかし大久保率いる政府軍の挑発で内乱となり、新平は首領として神輿を担がれる。政府軍の圧倒的な戦力の前に兵を解散し、逃亡者となる新平。大久保は国賊として新平の指名手配書をばら撒く。

新平はほどなくして捕縛され、大久保が佐賀に設けた臨時裁判所で裁かれる。新平への恨みを募らせた大久保は、新平が司法卿時代に禁じたはずの「さらし首」に処す。「唯皇天后土の我が心を知るあるのみ」。それが雄弁家・新平の最期の言葉だった。

その数年後、大久保の前に刺客が現れる。刺客は新平の亡霊となり、刀ではなく御縄を持って大久保を成敗する。

登場人物

江藤 新平 (7、16、28、40) 初代司法卿
大久保 利通 (20、47) 内務卿

西郷 隆盛 (39、46) 参議兼陸軍大将
岩倉 具視 (42、48) 右大臣
三条 実美 (30、36) 太政大臣
副島 種臣 (44、46) 外務卿
木戸 孝允 (38) 岩倉使節団メンバー
伊藤 博文 (30、32) 岩倉使節団メンバー・工部卿
山口 尚芳 (32) 岩倉使節団メンバー
大隈 重信 (35) 参議
板垣 退助 (36) 参議
後藤 象二郎 (35) 左院議長
大木 喬任 (41) 文部卿
園田 (35) 医者
江藤 源作 (25、41) 新平の弟
河野 敏謙 (28) 裁判官
鍋島 直正 (47、52) 佐賀藩主
島 義勇 (51) 憂国党首領
船田 次郎 (20代) 新平の弟子
山中 一郎 (20代) 新平の弟子
香月 経五郎 (20代) 新平の弟子
浦 正胤 (30代) 高知県役人
細川 是 非之助 (40代) 高知県役人
島津 久光 (43) 薩摩藩主
乗願 (50代) 吉祥院住職
姉小路 公知 (22) 公家
近松 基右衛門 (40代) 佐賀藩役人
平田 助大夫 (40代) 佐賀藩京都留守居役
小録 (20) 舞妓

江藤 胤光 (20、40代) 新平の父
江藤 浅子 (20、40代) 新平の母
江藤 千代子 (30、41) 新平の妻
江藤 熊太郎 (2) 新平の長男
ハミルトン・フィッシュ (63) アメリカ国務長官
ビスマルク (58) ドイツの政治家

○紀ノ国坂（朝）

人々の往来。
道の脇に、江藤源作（41）が立っている。トランクを持ち、旅行者のような出で立ち。
何かを待つように、道の先を見つめている。
馬車が走ってくる。

○同・馬車（朝）

揺られて、大久保利通（47）。顔面蒼白で、やつれている。
道の脇に、一人の男が立っているのが見える。
大久保のイメージ。
鋭い眼光でこちらを睨む男。その男は、江藤新平（40）。
驚愕し、おののく大久保。
大久保「江藤！」
馭者ぎよしやが馬を操りつつ、振り返る。
馭者「大久保様？ どうなさいました？」
大久保「……江藤の亡霊が、私を殺しに来た」
ぱたりと気を失う大久保。

○同（朝）

首を傾げるようにして、馬車を見送る源作。

○赤坂御所・外（朝）

馬車が入っていく。

○同・廊下

歩いていく白衣の園田（35）。
園田「大久保様、園田にございます」
大久保の声「入れ」

園田「失礼いたしました」
部屋に入る園田。

○同・寢室

園田「園田が入る。
布団で横になっている大久保。

園田「無事にお目覚めになり、何よりでございます。具合はいかがですか？」

園田「：：：。虚ろな目をしている大久保。
：：：。亡霊を見たそうでございます。」

大久保「いかに鼻で笑う大久保。」

大久保「お主、政治に関心はあるか？」

園田「難しいことはわかりませぬが、人並みに
には」

大久保「では、私が何を成し遂げたか知っておるか？」

園田「大久保様は、内務卿でございます」

大久保「気に入らない様子の園田。
返答に詰まる園田。」

大久保「法を作った」

大久保「それから警察も。まだあるぞ。人身
売買や仇討ちを禁じ、学制を整え、民権、
あだ

園田「さすが大久保様。民権は諸外国にも並
ぶ進んだ考えだと存じます」

大久保「自嘲する大久保。」

園田「はい？」

大久保「今述べたことは、すべて江藤新平と
いう男がやったのけたのだ」

園田「江藤新平：：：。そのお方は確か」

大久保「ああ、死んだ。いや、私が殺した」
不適な笑みを浮かべる大久保。

○メインタイトル『天地知る』

○江藤家・居間

ここから回想。

江藤浅子（20代）と新平（7）が習字を
浅子、新平の後ろから一緒に筆を持つ
てやり、手ほどきしている。
大久保N「江藤は私と同じように身分の低い
武士にありながら、学のある母から四書五
経を教えられた」

○弘道館・外観

T「佐賀藩校 弘道館」

○同・図書室

読書に没頭している新平（16）。両脇に、
本が山積みになっている。
新平の身なりはぼろぼろで寝ぐせも
立ったまま。
周りの学生が新平を見てひそひそと
笑い去るが、新平は本に集中して聞こ
えていない。
大久保N「人材の佐賀とも言われるほど秀才
ぞろいの中、江藤は学問にも武芸にも秀で
ていたと聞く。その頃私は――」

○大久保家・居間（夜）

暗くすさんだ家。雨漏りしている。
奥で母や妹が眠る中、大久保（20）は
か細いろうそくの明かりを頼りに、借
用書を書いては、わずかに二両の借り入れを
頼む文面。
大久保N「お由羅騒動で父が島流しにあい、
私は謹慎の身となった」
大久保N「その時に思っていたのだ。どんな
に学問に秀でようと、圧倒的な権力の前で
は簡単に捻り潰される」
雷鳴が轟き、大久保の顔が怪しく光る。

大久保「乗願殿」
乗願「そういえば。久光公は、国学者の平田

あつたね
篤胤が書いた『古伝史』を読みたがってお
った」

大久保「すぐにご用意いたします」
飛び出すように出ていく大久保。

○役場・書庫

本棚を必死に探していく大久保。

○友人宅・外

玄関先に大久保。
男が出てきて、書物を手渡す。
それを手に取り、期待に満ち満ちてい
く大久保。

○大久保家・座敷

「古伝史」を傍らに、書状をしたため
ている大久保。

○鹿児島城・御座間

碁盤の前で向かい合う久光と乗願。

乗願「今日はお渡ししたいものがございます」
乗願、「古伝史」を取り出す。

久光「これは。よくぞ手に入れてくれた」
久光、書物をめくっていくと、書状が
挟まっている。
手に取ってみる久光。

○鹿児島城・外観

○同・御座間

久光が碁石を打つ。
碁盤に、相手が碁を打つ。
その相手は、大久保。背筋を伸ばし、
上等な袴に身を包んでいる。
回想終わり。

○赤坂御所・寢室

得意げな笑みを浮かべている大久保。黙って聞いている園田。
大久保「私が見る悔しさを滲ませる。大久保N「私がこれほど回り道をしてようやく藩主に取り入ったというのに、江藤は違った。奴は、正面から突き進んでいきおつた」

○公家屋敷・外観

ここから回想。
T「1862年 京都」
大久保N「私は藩の公武合体運動の根回しのため、上洛しておつた」

○同・座敷

大久保(32)、姉小路公知(22)と向かい合って座っている。
大久保「久光公が、西郷らと兵を率いて京に向かつております。その後、薩摩から幕府へ改革を申し入れますゆえ、勅命をお願い申し上げます」

姉小路「それは良いのだが、大久保、そなたは佐賀藩をどう見ておる？」
大久保「佐賀藩、でございませうか？ 朝廷側にも幕府側にもつかず日和見を続けているところから、最終的に有利になつた方につくと見られます」

姉小路「それが、どうも違うようなのだ」
大久保「違う？」
姉小路「先日、長州の桂小五郎からの紹介で佐賀からの遣いが来おつた。その者が言うには、佐賀藩は長崎港の警備が重く、藩主の鍋島が身動きできないとのこと」

大久保「いぶかしむ大久保。
大久保「恐れながら、佐賀は各藩との関係を厳しく制限しております、二重鎖国とも言われ

ていきなす。そのような藩のことは、信用できなしかと」
姉小路「しかし、今や佐賀藩は最新鋭の大砲

も鑄造できれば蒸気船まで作れると聞く。
 佐賀が朝廷か幕府のどちらにつくかで天下
 がわかれると言つてもよい。
 大久保「にわかには信じがたいお話ですな」
 姉小路「だが、佐賀の遣いは驚くほど弁が立
 ち、聡明な者であつた。佐賀を敵に回すよ
 うなことは、くれぐれも避けたい」
 大久保「愕然とする大久保。佐賀藩から遣いが来る
 は、はずはない。その者は脱藩者に違いなかつ
 た」
 大久保「その佐賀からの遣い、名はなんと
 姉小路「江藤新平だ」
 大久保「大久保、聞き馴染みがない。
 大久保「藩の後ろ盾もなく雲上人の公家に
 大久保「藩の後ろ盾もなく雲上人の公家に
 接見した男。江藤新平とは何者なのか、こ
 の目で確かめよう」

○置屋・座敷（夜）

小録「（20）が舞を披露している。
 舞妓の声「失礼いたしました」
 舞妓が入つてきて、小録に耳打ちする。
 小録「嬉しそうに微笑む小録。お呼ばれされ
 ましたゆえ、ちよつと行つて参ります」
 大久保「まだ途中であろう」
 小録「すんまへん。明日に京を離れるそうで、
 最後にご挨拶を」
 大久保「……うむ」
 小録「失礼いたします」
 小録、部屋を出ていく。
 大久保、不機嫌そうに酒を呑む。

○同・廊下（夜）

歩いている大久保。
 襖の前で小録の声がして、立ち止まる。
 小録の声「もう京へは戻らるのでしよう。書

き物なんてなさらず、うちの相手してくださってもええじゃありませんか」

男の声「すまぬ。仕事帰りに直行したけん、記憶が新しかうちに記録ば書き留めんばい

かん」

大久保、九州訛りに眉をひそめる。

小録の声「そんなに大事なもんなんどすか？」

男の声「ああ。こいは自分の生死に関わるもんばい。国に帰って、藩主に見せるもんや

けん」

小録の声「まあ。大袈裟なこと」

男の声「おなご女子にはわからんき。ちよつと厠に」

足音が近づいてくる。

大久保、慌てて角に隠れる。

男、出てきて、階段を降りていく。

大久保、距離を保ってその男を踊り場まで追うが、よく姿が見えない。

小録が来る。

小録「あら、大久保はん」

顔を赤らめ、ホの字な小録。気恥ずかしそうに立ち去る。

小録「すぐ戻りますえ」

呆然とする大久保。男のいた部屋を覗く。

机に、書状が広がっている。

大久保、左右を確認し、入る。

○同・座敷（夜）

大久保、部屋に入ると、書状を見る。

達筆な字で、「京師見聞」とある。

ハツとする大久保。食い入るようにして、目を通していく。

大久保「そこには、各藩の動きを正確に把握した報告と、今後の佐賀藩のあり方について
の意見がまとめられておった」
圧倒されている大久保。

○同・厠（夜）

恐る恐る、厠の前に歩いていく大久保。

廁の中に一人の男。扉でよく姿が見えない。大久保、廁に並ぶフリをして待つ。廁から、男が出てくる。着古した木綿の衣服に、髪はぼさぼさなその男こそ、江藤新平(28)である。

大久保「待たれよ」

新平「何か」

大久保「その方、ここらで見ない出で立ちとお見受けする。どこの藩の者でござろう」

新平、余裕綽々しゃくしゃくの笑みで返す。

新平「亡命の身ゆえ、どこの藩の者でもありません。では」

去っていく新平。

その背中を、恨めしそうに見送っている大久保。

大久保「佐賀の脱藩者は確実に死罪。その男がどんなに優れていようと、私にはなんの脅威にもならないはずだった」

○道

新平が歩いている。

懐から書状を取り出す。

「京師見聞」の文字。

一目見て、再びしまう。

自信に満ち満ちた目で、闊歩していく。

○佐賀城・外観

T「佐賀城」

○同・御座間

家臣が控える中、鍋島直正(47)が「京師見聞」を黙々と読んでいる。

直正「江藤を呼び寄せよ。家老を通じて、脱藩による罰を言い渡す」

家臣「は」

○江藤家・外観

○同・座敷

白の着物の上に紋服を着た新平、覚悟を決めたように引き締まっている。新平と向かい合う胤光と浅子（ともに40代）、源作（25）、腹の大きな千代子（30）。千代子は熊太郎（2）を抱いている。

新平「それでは、行って参ります」
胤光「ああ」

新平「（千代子に）熊太郎とお腹の子のこと、

頼むぞ」

千代子「はい」

新平、千代子と熊太郎を目に焼き付け、源作とともに出ていく。

○鍋島志摩邸・外観

○同・大広間

近松もとろう えもん基右衛門（40代）に案内されてく

近松「しばし待たれよ」

近松、立ち去る。

腰を下ろす新平と源作。

他に誰もいない。

俯き加減な新平。

上座の方を見ている源作、新平にささやく。

源作「兄上、あれを」

源作、上座を指す。

新平、見ると、上座の黒塗りの机の上。三方があり、宣告書が置かれている。声を潜める源作。

源作「あれに兄上の宣告が書かれとるはずで

す。私が今から見て参ります。もし死罪で

新平「あれ、どうか今すぐお逃げください」

源作「素早く上座へ行く。」

宣告書を開く源作。息を飲む。
新平、極力小さな声で、必死に訴える。

新平「早う戻れ」

源作、そそくさと新平の横に戻る。

新平「どうだった？」

源作「兄上……永蟄居ちつきよでございます」

新平「そがんか！」

源作「兄上と源作、歓喜する。」

証です」
源作「兄上の見聞録が、直正公に認められた

新平「ああ。それにしてもお前は男ばい。よ

う立ち上がってくれた」

源作「兄上こそ。もう脱藩などと命を捨てる

ような真似はおやめください」

新平「わかっとなる。心配をかけたな」

安堵して待つ新平と源作。

回想終わり。

○赤坂御所・寢室

大久保と園田。

大久保「江藤が謹慎している間、薩長は同盟

を結んだ。しかし將軍慶喜との二条城会談

は決裂し、薩摩は武力による討幕を固めた」

○佐賀平野

ここから回想。

T「1867年」

必死の形相で走っている新平（34）。

○近松家・玄関

新平が走ってくる。肩で息をしながら。

新平「近松殿！江藤にございます」

近松、馬から降りる。

近松が出てくる。近松、江藤を見るな

りうろたえる。

近松「江藤、謹慎中の身であろう」

新平、構わず切迫した様子。

新平「大政奉還がなされたとは誠であろうか」

近松「ああ」

新平「どうか、膝をついて近松に懇願する。」

近松「お前、なんば言いよつか。脱藩して

永蟄居のモンが藩主に会えるわけなからう」

新平「しかし、佐賀藩のなすべきことを、直

接進言したく思います。この機ば逃したら、

佐賀藩は新しか時代に乗り遅れますぞ」

新平「江藤の物言いに、有無を言わせぬ凄み

○佐賀城・外観

○同・御座間

縁側でひれ伏している新平。(52)が

側近を引き連れ、上座に直正

直正「腰を下ろす。上座に直正」

新平「は」向かい合う、新平と直正。

直正「表を上げよ」身の様子。冷静だが、頬がこけて病

新平「江藤新平は委縮している。5年前に帰藩

した際、寛大な処置を施してください。深くこ

がとうございまして」額をうずめるほどに深くこ

直正「余は人を重んじる。お主のことも、お

主が書いた『京師見聞』のこと覚えてお

新平「名前を呼ばれ、涙が込み上げてくる新平。

直正「それで、この局面をどう見ている」

新平「はい。海外に列強の脅威がある以上、

直正「日本国内で争っている場合ではありません」
新平「同意だ。それで、どう動く」
直正「佐賀藩が各藩を沈め、日本の中心になるのです。侍の世を、佐賀が終わらせねばなりません」
直正「面白そうに微笑する。
直正「侍の世を終わらせる、か。アームストロング砲も蒸気船も作り上げた我が藩の軍力なら必ず日本を動かせるだろう。ただ」
直正「含みを持たせた直正に、委縮する新平の。あのだ。つまり日本を守るために向けるためのもので、壊すためのものではない」
新平「は」
直正「今度は余が正式に命じる。京へ参れ、新平。薩長に利用されることなく、佐賀藩の進むべき道を見定めてくるのだ」
新平「承知いたしました」
新平の顔に、活力が満ちている。

○道

荷物を持ちながら、歩いていく新平。顔には疲労の色が見え、膝を抱える。腰には銀装の刀が大小携えてある。新平、それを見て大きく息を吐き、再び歩いていく。

○伏見・街中

呆然と立ち尽くす新平。
新平の前には、焼け落ちた建物の他、死体がそのまま転がったりしている。T「京都 伏見」
その中を重い足取りで歩いていく。

○佐賀藩京都藩邸

新平「江藤新平と申す。佐賀藩主、鍋島直正の命で参った」
しかめてしまう。
ささやかな佇まいを見て、

○同・座敷

新平と向かい合う平田助大夫（40代）。

平田、悠長に茶を飲んでいる。

新平「平田殿、京での一日が佐賀藩の百年ば

左右します。鳥羽・伏見で出遅れた分ば早

う取り返さんと、薩長には並べませんぞ」

平田「ばつてんどがんとさ、佐賀の軍事力ば

新平「まずは公家に近づき、幕府軍が巻き返

お伝えします。そいでもし幕府軍が巻き返

しても、佐賀がそいば沈めてみせると申す

のです」

平田「公家に近づくと怪訝そうにしている。

ではなあ……」

平田「旅埃で汚れた木綿の服を着た新平。

新平「なあに、言うことがしつかりしておれ

ば、見てくれなど関係なかでしょう」

平田「いや、それでは佐賀の恥じゃ。こいで

何か見繕え」

平田、包みを新平に渡す。

新平、開けると小判がぎっしり入って

いる。

目を見張る新平。

○三条家・外観

○同・御前

縁側に座り、平伏する新平と平田。

新平は絹の衣服を着ている。

平田「佐賀藩京都留守居役、平田助大夫にご

ざいます」

新平「佐賀藩郡目付、江藤新平にございます」

三条の声「表を上げよ」

新平、顔を上げる。

座敷に悠々と座る、三条実美（30）。

三条「佐賀の者が訪ねてくるとは珍しいのう」

新平「この乱世において、佐賀藩が力になる

べく参りました」

三条「……ほう」

三條「佐賀は、最終的に勝つ方につくつもり

ではないか？」

新平「なぜそのようなことを？」

三條「この京で佐賀の評判は大層悪いのでな」

新平「心当たりがない様子。」

三條「新政府になり、佐賀藩には藩主自ら兵

を率いて上洛せよとの命令があつたはず。

しかし佐賀藩は何も動かぬままではないか」

新平「それは……」

新平「平田を見ると、ばつの悪そうに

している。

新平「佐賀藩には長崎港の警備という大役が

ございます。国内が乱れている今こそ、外

国からの守りを固めなければなりませんゆ

え」

三條「しかし薩長が討幕に向けて激しく動い

ている中、佐賀は日和見をし過ぎていてこ

とも事実」

新平「ええ。だからこそこの江藤が藩命を受

けて参つたのです。これから江戸で幕府軍

と戦うにあたり、我が藩の船と大砲が必ず

必要になる時がくるでしょう」

三條「本当に、船と大砲を持って出撃するの

だろうな？」

平田「……それは――」

新平「ええ。必ず」

新平「言つてしまつた、と気が気でない平田。

三條「しかし、砲弾は一発も放ちませぬ」

新平「ん？ どういうことじゃ？」

新平「軍事力はいくまで見せつけるもの。そ

うやつて敵の戦意を削ぎ、戦わずして勝つ

のが本来の使い方になります」

三條「ほう。人を治めるのは、軍事力という

ことか」

新平「いいえ」

三條「ん？」

新平「語気が強まる。

ん。徳川の世が終わり、新時代が来れば、

この江藤新平が新しい法を作りましょう」

大真面目な新平。
体を震わせる三条。

三条「ホホホホ」

三条の笑い声が響く。壺に入ったらし
く、なかなか止まらない。

唾然とする平田。

三条「面白い。気に入った」

腹を抱えて笑い続ける三条。

平伏する平田。

渋々、平田にならう江藤。

○薩摩藩京都藩邸・外觀

○同・玄関

姿見の前で身なりを整えている大久
保（37）。奥に声をかける。

大久保「吉之助、行くぞ」

西郷隆盛（39）、歩いてくる。

西郷「うむ」

○岩倉家・外

大久保と西郷が来る。

大久保「岩倉様、大久保にございます」

奥から岩倉具視（42）が出てくる。周
囲を気にするようにして、そそくさと
大久保と西郷を招き入れる。

○同・座敷

膝を突き合わせて座る大久保、西郷、
岩倉。

西郷「岩倉様、今こそ江戸に進軍すべきでござ
わす」

岩倉「そうじゃな。しかし、万全を期す」

大久保「万全？ 既に薩長土が同盟を組み、も
はや敵なしですぞ？」

岩倉「いや、佐賀がおる。江戸城を攻め落と
すには、佐賀の大砲と軍艦がいるであろう」

大久保「……佐賀？」

新平の声「岩倉様、参上いたしました」
岩倉「来おった。大久保、迎えてやってくれ」
大久保、いぶかしむも、席を立つ。

○同・玄関

大久保、戸を開ける。
新平が立っていて。
ハッとする大久保。

大久保「お主は」
新平「佐賀藩の江藤新平と申す」

大久保「大久保も初対面の見覚えがない様子」
大久保「薩摩藩の大久保一蔵と申す。さあ」

○同・座敷

岩倉と西郷。
大久保が新平を引き連れてくる。

新平「岩倉様」
岩倉「よう来てくれた」

西郷「薩摩の西郷吉之助にごわす」
新平「佐賀藩の江藤新平です。藩命によって

岩倉「早速だが、磨たちはこちらから江戸に進
軍する。佐賀も加わるな？」

新平「いや、江戸城を攻めるのは反対です」
岩倉「然とする大久保、西郷、岩倉」

新平「慶喜公は既に降伏したも同然です。戦
意なき者を討つのは、人としての道を外れ

西郷「なしそがんことわかとですか？」
新平「もし慶喜公が陸路で京から江戸に戻れ

ば、道中で兵力を増強できたでしょう。意
かしの船で帰ったところを見ると、抗戦の意

大久保「甘い。我々がどれだけ綿密に準備を
重ねてきたと、思うておられるか。慶喜を首

にせねば、王政復古はならぬのだ」

鼻で笑う新平。

大久保「なんだ？」

新平「物事に時間や金をかけるほど、それに固執して目が曇っていくものです。もう戦国の世ではありません。武力ではなく知性を持つて時代を拓くのです」

岩倉「そうか。やはり佐賀は幕府の味方なのだな？ それなら今すぐにここを立ち去り、磨たちとの戦に備えるがよい」

怪訝そうに、敵対心を向ける岩倉、西郷、大久保。

しかし新平はうろたえない。

新平「そうではありません。今、薩長にはイギリスがつき、幕府にはフランスがついております」

言葉に熱を帯びてくる新平。

新平「どちらも国内の混乱に乗じて日本を我がものにしようとしている。それが最も危険すべきことなのが変わりませぬか！ 国内で争っている場合ではないはずです」

返す言葉がない大久保、岩倉。

西郷は、どこか納得したように思慮深く考えを巡らせている。

西郷「なるほど。しかし、まだ幕府軍から攻めてくることも考えられますゆえ、進軍ば止めるわけにはいきもはん」

新平「ご心配は無用です。自分が江戸へ出向き、慶喜公の去就を探ってきます。それゆえ、武力による討幕は待っていただきたい」

大久保「悠長に待っている暇などない。第一、そんな勝手が許されるか」

余裕の笑みを浮かべる新平。

新平「勝手ではございません」

大久保「何？」

新平「これは、三条実美様の命であります」

岩倉「三条様の？」

新平を恨みがましく睨む大久保。

西郷「わかり申した」

大久保「吉之助？」

西郷、大久保を制するよう続ける。

西郷「ただし、同時に江戸へ進軍します。江戸に到着した時、江藤さんからの報告は聞きましよう。それで良かですね？」

新平「ええ」

不服そうな大久保。

○江戸・城下町

乞食の恰好をして歩く新平。

○道

銃や刀を持った兵士たちの行列が進んでいく。

○宿屋・座敷（夜）

書き物をしている大久保。

「大坂遷都 建白書」の文字。

大久保、書き進めていく。

○薩摩藩江戸藩邸・外観

新平、西郷、大久保。

新平「慶喜公の恭順に嘘偽りはございません」

西郷「そうでごわすか」

大久保「信じられるのか？」

西郷「こがん言いはるとは江藤さんだけじゃなか。そいに、イギリスからも今の慶喜公ば殺すとは人道に反するて釘ば刺されとる」

新平「左様。もはや江戸城に入るのに、銃も刀も大砲もいりませぬ」

西郷「そうかもしれんでごわすな」

新平と気心が知れたように笑う西郷。

大久保、それを見て愕然とする。

○同・書齋

大久保が書き物をしている。

新平「何が書いていますか？」

大久保「大坂遷都の建白書です」

新平「都を大坂に？なぜです」

大久保「まず京には公家が多い。それゆえ、天皇を大坂に移すことで公家の力を弱め、

新平「一般人の溝を埋めます」

大久保「ほ、また地理的にも陸海軍を置くのに好

ましく、富国強兵を図りやすいのです」

新平「いや、都を大坂に移せば、新政府は1

年で潰れるでしょう」

大久保「何？」

新平「都は江戸に移すのが一番です。既に江

戸幕府の庁舎があるゆえ、新しく建てて必

要もない」

大久保「幕府のものをもそのまま使うのでは、

結局中身は変わらぬ限り大丈夫でしょう」

新平「猿が上に就かぬ限り大丈夫でしょう」

この乱世で財政も厳しい中、何年もかけて

大坂の拠点づくりからやっていたのは、

その隙に反乱が起きますよ」

新平「邪魔をされました。失敬」

大久保「感情を押し殺すようにしてい

るが、みるみる怒りに満ちていく。討幕に

横やりの入りを私長年苦心してきた西郷も

あつという間に打ち解け、新政府の中心に

立ちとうとしていた」

大久保「感情に任せ、建白書をぐしやぐしやに

す。大久保の言う通りになつた」

大久保「ただ、江戸城の無血開城も、東京

遷都も、江藤の言う通りになつた」

○江戸城・大手門

T「1868年」

三十人の公家行列が入城していく。

その中に、公家の恰好をした西郷、大

久保、新平がいる。

新平、江戸城の莊厳さに圧倒され、き

よろきよろしながら歩いていく。

○同・廊下

城内を見て回っている大久保と西郷。
大久保「書庫ば見てくる」
西郷「早速仕事でござるか」
大久保「ああ。早う新しい国の仕組みば作らんと」
西郷「おいはもう少し城ば見てから行く」
大久保「ああ」
大久保、歩き去る。

○同・評定所・書庫

棚に本や書類など、膨大な資料が詰ま
っている。
大久保、入ってきて、奥に進んでいく。
何かが目に入り、立ち止まる。
新平がいる。自分の周りに本の山を築
いていて、物凄い集中力で読書にふけ
っている。
大久保「江藤さん」
新平「ああ、大久保さん」
大久保「茶化すように言う大久保。
新平「新政府がまず何をすべきか、見えま
したかな？」
新平「ええ。まずは江戸市民の救済です。中
央の繁栄なくして、日本は豊かになりませ
んから」
大久保「ほう。そんなに江戸は貧しいのです
か？」
新平「ええ。今江戸の人口は約二百万人です
が、そのほとんどの生計が苦しくなってい
ます。何か救済措置を考えねばなりません」
新平、本の山の中から数冊を選び抜き、
小脇に抱えて立ち去る。
新平「では」
大久保「：：江藤さん」
新平「はい」
大久保「やけに江戸に詳しいようですが、ど
こでお知りになったのです？」
新平「今読みました」
あっけらかんとした新平、出ていく。
取り残される大久保。

積み重ねられた本の山を見て、焦りの表情。回想終わり。

○赤坂御所・寢室

大久保「一を十にも百にもできる者は新政府にも多くいた。しかし、ゼロから一、つまり仕組みを作る人間は、私か江藤だけだった」

大久保「ほくそ笑む大久保。」

大久保「だが、私と江藤の違いはなんだと思

園田「……さあ」

大久保「上を見ているか、下を見ているかだ。江藤は下にいる民衆のことしか考えておらぬ。その間、私はこの国の高みに近づいていた」

○江戸城・岩倉の執務室

ここから回想。

T「1871年」

岩倉（46）と大久保（41）。

大久保「書類を確認している。」

「岩倉使節団」の文字と、それらのメ

ンバーが書き連ねられている。

その中に、江藤新平の文字。

大久保「江藤は日本に残すべきでしょう」

岩倉「なぜじゃ」

大久保「三条様が特に江藤を気に入られてお

ります。我々が留守の間、右腕的存在がい

なければさぞ心細いでしょう」

岩倉「確かにそうだが……これを見よ」

岩倉「書物を渡す。」

大久保「受け取ると、「対外策」とある。

岩倉「江藤が世界情勢と日本の外交方針をま

とめたものじゃ」

大久保「読んでみる。」

大久保「そこにはロシアがアジアを呑まん

として起すこと、ドイツが大国と組んで世

界大戦を起すとの推察までなされていた」

西郷「任せい」
岩倉「良いか。磨たちが留守の間、何も政治を動かすでないぞ」
新平「岩倉様たちは、諸外国と良い関係を築くことだけをお考えください」
岩倉「ふむ。では行って参る」
西郷「お気をつけて」
岩倉使節団、船に乗り込む。
新平「今、政治を止めるわけにはいきません。大義名分ならあとでなんとでもつけ足せるでしょう」
西郷「そうでごわすな」
船が出航する。
大砲から祝砲が放たれる。

○洋館（夜）

立食パーティーが開かれている。
岩倉、大久保、木戸、伊藤、山口。アメリカ人に囲まれながらワインを飲んだりしている。
岩倉「しかしこんなに歓迎されるとはのう」
大久保「つい最近まで鎖国していた日本人が物珍しいのでしょう」
岩倉「この様子なら、案外条約の改正も上手くいくかもしれぬ」
大久保、周りの様子を窺う。和気あいあいと食事を楽しむ使節団のメンバーやアメリカ人たち。
大久保、満更でもない様子。

○同・談話室

委縮して、気まずそうに座っている岩倉、大久保、木戸、伊藤、山口。
向かい合うハミルトン・フィッシュ(63)らアメリカの外交官たち。テーブルの書類を見ながら、怪訝そうな顔を浮かべている。

フィッシュ「(英語で)この全権委任状には、

条約の交渉権限について記されていません」
山口「：この委任状には、条約交渉の権限がないと」
言葉を探す大久保。

○同・控室

岩倉、大久保、木戸、伊藤、山口。
木戸「まずは委任状の再発行、それからです」
岩倉「木戸の言う通りじゃ。それがないと話にならない。大久保、伊藤、日本に戻り、委任状を発行してきてくれるか？」
伊藤「承知いたしました」
大久保、神妙な面持ち。

○船・甲板

潮風に吹かれながら、陰鬱な顔をして
いる大久保。
大久保N「その頃、江藤は初代司法卿に就任していた」

○司法省・書斎

書き物をしている新平。
役人が来る。
役人「江藤様、面会したいという者が来ております」
新平「誰かな」
役人「元土佐藩士で司法省を志望していると」
新平「通せ」
役人「はい」
役人が立ち去る。
河野の声「失礼いたします」

河野敏鎌（このとがま）（28）が来る。伏し目がちで、
気弱な佇まい。
河野「河野敏鎌と申します。突然のご訪問、恐れ入ります」
新平「構わん。君は高知出身だそうだな。何をしておった」
河野「土佐勤王党に所属し、武市半平太さん

や坂本龍馬さんらと勤王運動をしております。善と悪、どちらから成ると思う？「この世は

河野「悪です。もし道徳心と云った善から世が成るのなら、どの国にだって法も警察もいらぬはずですよ」

新平「吹き出す新平。恐縮する河野。警察は、自分も同じ考えである。この国の法と

河野「君も司法省に加わって見ないか？」河野「あります。藩が公武合体に傾き、勤王

派の私は6年の間投獄されておりました。新平「自分も、脱藩の罪で5年謹慎しておつた。でも見ろ。今となつては司法卿だ」

新平「人智は空腹より出ずる。君には良い裁判官になれる見込みがある。明日から司法省に勤めよ」

河野「河野、感激のあまり平伏する。たもの、行く当てもなく、途方に暮れておりました。このご恩は忘れません」

○同・会議室

職員たちが整列する中に、河野がいる。職員たちと向かい合うようにして立っている新平。「三権分立」と書かれた額が新平の背後に飾られている。

新平「法なるものは2年あれば施行し終わり、5年経てば市民の生活に溶け込む。これから日本を、我らの手で法治国家にする」

新平「傾聴している河野。また、刑法について人道に反するとこ

ろがあり、欧米にひどく遅れをとっている」
熱弁する新平。

新平「今後は磔はりつけを固く禁じ、さらし首は斬首に改める。他にも、絞首刑は終身刑、むち打ちや島流しは懲役とする」

○同・書齋

新平、書き物をしているが、思い悩んだように手が止まっている。

副島「江藤、副島だ」

新平「お入りください」

副島種臣(44)が入る。

新平「副島さん、外務省でなんかあったとですか？」

副島「そいが、岩倉使節団がどうも上手いっとならんらか。今、委任状ば再発行するために大久保と伊藤が日本に帰ってきよる」
新平「それは、むしろ都合が良か」

副島「副島さん、簡単に委任状ば再発行してはなりませんぞ。なるべく時間ば稼げば、使節団の評判ば下げられる」

副島「江藤、お前」

新平「佐賀は維新に出遅れたとです。使節団が外交でもたつきよる隙に、まずは長州の

汚職ば裁いていきますけん」

副島「確かに使節団と長州の怠慢は糾弾すべきばつてん、敵ば増やすぞ」

新平「大丈夫です。法が守ってくれますけん」

副島「法ねえ：：ああ、忘れとった」

副島、書類を取り出し、新平に渡す。

新平「こいはなんですか？」

副島「フランスのナポレオン法典ば少し訳させたもんたい。参考になるやろうて思うて」

さつと読み進める新平。

新平「参考になるどころか、こいばそのまま日本の法にしても良かくらいです」

新平「生き生きしてくる新平。」

新平「副島さん、多少の誤訳はよかけん、こ

副島「いば一刻も早う訳してくれんですか」

副島「副島、立ち去る。」

新平「お願いしますよ」

大久保「期待に満ちた目で見送る新平。」

大久保「N」それから江藤は、私腹を肥やして
いた長州の政府高官を次々と摘発していつ
た」

○外務省・廊下

気おくれしたように俯き加減で歩いて
いる大久保と伊藤。

大久保「部屋の前に立ち止まる。」

副島「お入りを」

大久保「伊藤「失礼します」

大久保と伊藤、中に入る。

○同・書齋

大久保と伊藤が入る。

副島がいて。

副島「大体話は聞いております」

大久保「では早速ですが、条約改正の権限を

含めた委任状を発行ください」

副島「いや、できません」

大久保「ムツとするも、冷静に応じる大久保。

副島「なぜですか」

副島「そもそも今回の目的は親善であって条

約の改正ではなかったはずで、関係性も

できていないのに交渉を早まった軽率さが

招いた事態です」

伊藤「その言いようは、あんまりではないで

すか」

副島「失敬。ただ実際、委任状を再発行して

も、アメリカが条約改正に応じるとは思え

ませぬな」

大久保、堪えて押し黙る。

○司法省・廊下

大久保が、庁舎を観察するように見回

しながら歩いている。
新平が来て。

新平「おや」
顔を合わせる新平と大久保。

大久保「江藤さん、留守政府は現状維持の約束ではなかったですか？それがなぜ司法卿を名乗り、好き勝手に改革をなさっているのです」

新平「そちらこそ、日本と外国との関係を改善するのがお役目では？何も変わっていないようにお見受けする」

「いがみ合うように視線が交錯する新平と大久保。」

新平「失敬。何も変わっていないのではなかったですな。むしろ悪くなっている」

新平、大久保の横を通り過ぎる。
大久保、恨みがましく、その背中を睨みつける。

○写真館

横に並ぶ岩倉、大久保、木戸、伊藤、山口。岩倉は袴に鬘、その他はスーツを着ている。

誰も口を開かず、疲れ切って意気消沈した様子。

職員がカメラを構える。
一同、ポーズをとって静止する。

「シャッターが切られる。」

大久保「その後も特にこれといった成果を上げられぬまま、惰性の旅は続いた。ただその中で、私は運命的な出会いを果たした」

○ビスマルク邸

整列し、敬礼する軍隊の兵士たち。

その中を歩いていく大久保、岩倉、木戸、伊藤、山口。

大久保、圧倒されながら歩いていく。一行が向かう先に、勇ましく立っているビスマルク（58）。

ビスマルクに羨望の眼差しを向ける

大久保 N「大久保。
大久保 N「日本が手本にすべきはドイツだと
確信した。軍事を高めてこそ初めて外国
と対等になれる。」
回想終わり。」

○赤坂御所・寢室（夕）

大久保と園田。
大久保「神を崇めるように天を仰ぐ大久保。
大久保「そして、かのビスマルクのように、
天皇の名のもとに政治を独裁するのが私の
理想となつた。」

○江戸城・廊下

ここから回想。
大久保 N「三條様の命により、私は先んじて
歩いている大久保（43）。
帰国した。」

○同・会議室

新平（39）、三條（36）、西郷（45）、大
隈重信（35）、板垣退助（36）、後藤象
二郎（35）、大木喬任（41）が会議をし
ている。
たかとう

そこに、大久保が来る。

三條「大久保」
大久保「ただいま帰りました」

西郷「久しぶりじゃのう」
大久保「ああ」

新平は歓迎するでもなく、特に大久保
を氣に留めていない様子。
西郷「帰って早々で悪かばつてん、朝鮮との

関係が悪化しとる。居留人保護のため、お
いが大使として朝鮮に行こうて思いよる」

三條「西郷。変に刺激して戦にでもなつたら
大變じゃと申しておろう：大久保、お前

からもなんと申すてくれ」
大久保「三條様の言う通りじゃ。国の地盤も

固まつていない今、もし朝鮮との戦になれ

ば、外国から狙われる」

新平「鼻で笑う新平。武力討幕を推し進め

ていたとは思えぬ発言ですな」

大久保「何？」

新平「率直に申し上げて、一年半の間外交

に失敗してきた者の出る幕ではありません」

西郷「江藤さん、そいはい過ぎじゃ」

大久保「睨み合う新平と大久保。黙って立ち去る。」

○同・廊下

歩く大久保。殺意に満ちたような目。

○同・会議室

西郷「三条様、朝鮮派遣ば、天皇陛下に奏上
してください」

三条「：右大臣の岩倉が戻ってから正式に
進めることとする」

○岩倉邸・座敷（夜）

大久保「勝海舟との会談で江戸を無血開城さ
せた吉之助です。朝鮮に行けば、戦にせず

とも関係改善に成功するでしょう」

岩倉「：：そうならば、20か月もの磨たちの
外交は、ただの海外旅行になる」

大久保「ええ。政府に私たちの席はなくなる
でしょう。三条様は戦に怯えております。」

岩倉「：：その線を強く攻めるのです」

○江戸城・会議室

新平や西郷、三条の他、大隈、板垣、
後藤、大木、副島（46）がいる。

三条「これで全員じゃな」
 岩倉「日本の主な議事は、西郷の朝鮮派遣についでである。大久保」
 大久保「はい。朝鮮に大使を送れば、すぐに戦になりませぬ。まずは富国強兵を図り、軍事力を高めるまで派遣は延期にすべきです」
 西郷「：一蔵」
 大久保「構わずに続ける。大久保「戦になれば不平を持った士族の反乱になり、ますます人民の生活を苦しくします。また、国内が幕末のような混乱に陥れば、外国からの干渉を招きます」」
 三条「それはいかん」
 新平「毅然としている新平。大久保「その理論は破綻している」」
 新平「そもそも、戦が起こる前提で話を進められると議論が曇ります。西郷さんは戦をふっかけに行くのではなく、丸腰で和平の交渉をしに行くのですから」
 大久保「交渉が上手くいくとは思えませんな。必ず戦になるゆえ、まずは国内の整備が最優先だと述べておるので」
 新平「だからその、必ず戦になるという根拠が乏しい」
 大久保「朝鮮の後ろにはロシアがいるはず。そことの戦も避けられぬものになって良いと申すか」
 新平「確かに朝鮮を敵に回せばロシアとの戦も覚悟せねばならない点は同意です。ただ、戦になるのが確定しているほど外交関係が悪化しているのなら、もはや派遣自体が意味をなしません」
 新平「押し黙る大久保。新平「大久保さんの理論を通すなら、派遣は延期ではなく中止でしょう。国ごと臨戦態勢に入るように動かしていく必要がありますが、さすが、そういうことでよろしいのですか？」」

西郷「何も返せなくなる大久保。このちらが礼を持って尽くせば、必ず朝鮮との和平が開かれると思う。ちよる」
大久保「吉之助が言うごと単純じゃなか」
岩倉「そこまでじゃ。ちと考える時間が欲しい。続きは明日の閣議にて行おう」
西郷「おいはもう、言うべきことは言いました。こいで派遣がなくなるとなら、おいは辞職します」
三条「西郷、立ち去る。」

○同・外観（朝）

○同・会議室（朝）

新平や岩倉、大隈、板垣、後藤、大木、副島。
西郷の席は空席。
三条「西郷以外は来ておるな」
三条「一同、口を閉ざしている。」
三条「昨日と意見の変わった者はおらぬか」
沈黙。
三条「深いため息。」
三条「わかった。岩倉、二人で話せるか」
岩倉「はい」
三条と岩倉、立ち去る。

○同・別室（朝）

三条「西郷に辞められては困る。しかし外国との戦になっても困る。正直、どうすれば良いのか。」
岩倉「岩倉も意気消沈している。新政府に不満を持つ西郷が下野すれば、外方志士の戦の前に、再び内乱が始まることの方配にございます」

三条「そうじゃのう……」

○同・会議室（朝）

三条と岩倉が戻ってくる。

二人に注目する新平や大久保、大隈、板垣、後藤、大木、副島。

岩倉「西郷を、朝鮮に派遣する」

啞然とする大久保。

当然のように構えている新平。

大久保「なぜそうなるのです」

岩倉「：：西郷は、新政府に必要じゃ」

愕然とする大久保。

○三条邸・座敷（夜）

三条がいる。

大久保の声「失礼します」

大久保が入る。

恐縮する三条。

三条「：：大久保」

大久保、懐から書状を出す。

「辞表」とある。

三条「：：これは、本気か」

大久保「はい」

大久保、立ち去る。

三条「待て、大久保」

構わずに出ていく大久保。

三条「：：どうしろというのじゃ」

塞ぎ込む三条。

○江戸城・会議室

新平、三条、西郷、板垣、後藤、副島以外は空席。

西郷「三条様、議論は尽くされました。今日こそ朝鮮派遣は陛下に奏上してください」

三条「：：岩倉がおらぬ」

西郷「三条様」

三条「このように政府が二つにわかれてしま

つては陛下に合わせる顔がない。岩倉の賛

成が、まだ決断できぬと申されまますか！」

西郷「まだ決断できぬと申されまますか！」

新平「まあまあ西郷さん。あと一日です。すべてが決めるのです。ここは待とうではありません。ま

せんか」

西郷「西郷、落ち着きを取り戻す。」

三条「あとも一日でござす」

三条「すまぬ」

大久保「新平、余裕の笑みを浮かべている。道となった」

道となった」

○岩倉邸・座敷

岩倉と三条。

三条「必死に懇願する三条。」

岩倉「頼む。閣議に戻ってくれ」

岩倉「三条様、朝鮮派遣は、西郷を取るか、

倉使節団の面目が潰れた今、磨も大久保と

政府を去ります」

三条「：：岩倉」

○三条邸・廊下

呆然自失の三条、歩いている。

立ち眩みがして、ぱたりとその場に倒れる。

○大久保家・座敷

伊藤の声「大久保さん」

伊藤「伊藤（32）が駆け込んでくる。」

大久保「どうした？」

伊藤「三条様が、倒れました」

大久保「三条様、目を見開く。勝ち誇ったよう

な笑みを浮かべる。」

大久保「天は、私を味方した」

大久保「天は、私を味方した」

○岩倉邸・座敷（夕）

岩倉と大久保。

大久保「今こそ岩倉様が太政大臣代理となり、

朝鮮派遣をとりやめるべき旨を奏上するの

です」

岩倉「ここから先は、修羅の道か」

○皇居

正装をして、仰々しく歩いていく岩倉。

○江戸城・会議室

江藤、西郷、大久保、大隈、板垣、後藤、大木、副島。

岩倉が来て、三条の席に座る。

いぶかしむ新平。

岩倉「知つての通り、三条様が倒れた。

しばらく絶対安静のため、麿が太政大臣代理を務めることになった」

不安げに聞いている新平、西郷。

岩倉「それから、朝鮮派遣について、陛下に奏上して参った。その結果、派遣は中止とする」

息を飲む新平。

押し黙る大久保。

西郷「どういうことでござるか？」

新平「さては、中止するよう陛下に進言なされたな？」

岩倉、口籠る。

新平「岩倉様は代理であつて、あくまで太政大臣である三条様の意見をそのまま伝えるのが筋でしょう。それを――」

岩倉、声を張り上げる。

岩倉「これは勅命である！ 逆らうなら、国賊とみなすぞ」

新平「国賊？ 卑怯な真似を働く者こそ国賊だ」

西郷「愛想が尽きた様子」

西郷「おいはもう、辞職します」

西郷、立ち去る。

新平も続く。

大久保「これを堪えている大久保。」

大久保「これが明治六年政変である」

○同・岩倉の執務室

大久保、岩倉に書状を渡す。

大久保「内務省設立の意見書」とある。
「私が初代内務卿となり、天皇に代わ
って政治を行います」

威風堂々と立つ大久保。

委縮してしまふ岩倉。

岩倉「：お前は、日本のビスマルクにでも
なるつもりか」

冷徹な大久保の顔。

○司法省・書齋

神妙な面持ちで書状を見ている大木。
大木の前には職員たちが押しかけて
いる。

職員「江藤司法卿が辞職されるのなら、私も
辞めます」

職員一同、退職届を置いて立ち去る。
入れ替わるように、退職届を持った職
員たちが次々と押し寄せる。

大木「辞める者は届をここに置いていけ」

職員たち、大木の机に退職届を出し、
入れ代わり立ち代わり出ていく。
退職届の束。

○同・執務室

職員たちが荷物をまとめて次々と出
ていく中、自席でおどおどしている河
野（30）。

○延命院

T「佐賀 延命院」

「征韓党」の旗が風になびく中、大勢
の志士たちが集まっている。

志士「江藤新平先生の名のもとに、朝鮮を討
つべし！」

志士たち「おお！」
活気づく志士たち。

○江藤家・座敷

新平が荷造りをしている。

千代子の声「どうぞ」

新平「副島さん」
副島「：江藤、なんばしよるとか」
新平「見ての通りですよ。佐賀に帰ります」
副島「よせ。今、佐賀では反乱志士たちが征韓党ば立ち上げて、お前ば党首に祀り上げるとる」

荷造りをやめない新平。

新平「知っておりませう」

副島「じゃあなし帰るとか。内乱にでもなれ

新平「このまま放っておけば、それこそ名前

を勝手に使われたまま暴発するでしょう。

副島「やめる前に、沈めに行くのです」

副島「担がれ、もはや佐賀は収集がつかん状態

に担がれ、もはや佐賀は収集がつかん状態

新平「それでも行きます。日本が法治国家で

あることば、直接説き伏せてみせますけん」

自信に満ちた新平の目。

○横浜港

トランクを持って歩いている新平。

船田次郎、山中一郎、香月経五郎（い

ずれも二十代）と落ち合う。

船田「山中・香月（口々に）先生」

新平「おう、久しぶりやなあ」

船田「我々が佐賀までお供します」

新平「うむ。よろしく頼む」

船田「参りましょう」

船へ歩いていく新平たち。

○町中

T「1874年 佐賀」

閑散とした中を、新平、船田、山中、

香月が歩いていく。

家財道具を抱えた老夫婦が家から出

てくる。

新平「すみません、やけに人気のなかばって

ん、住人はどこに行かれたとですか？」

男「みんな避難したばい。政府の軍が佐賀に攻め込んでよるらしか」

新平「政府軍が？」

男「あんたらも早う逃げんしゃい」

老夫婦「逃げ去る。」

新平「急がねば」
歩みを速める新平。

○延命院（夜）

押し寄せた志士たちの前に立つ新平。
不満そうな志士たち。

新平「征韓論は間違いである。また、政府に不満があるのなら武力に訴えるのではなく、法を持つていたすのだ」

志士1「不満そうな志士たち。」

志士1「江藤先生は、西郷さんと征韓論ば進めよつたとじゃなかとですか？」

新平「違う。西郷さんは和平の大使として朝鮮に派遣される予定だった。決して武力侵

攻のためではない！」

志士2「ばってん、佐賀は明治維新に遅れた分、朝鮮で先に手柄ば上げにやなりません」

「そうだ」と志士たちが口々に叫ぶ。

新平「馬鹿者！日本は文明国である。そのよ

うな蛮行に走れば、欧米諸国からの信用を

失い、日本はますます遅れをとる」

志士3「：：あれはなんじゃ？」

志士が遠くを指さす。

新平、志士たちを掻き分け、躍り出る。

息を飲む新平。

遠くの方で、火の手が上がっている。

立ち込めていく黒煙。

志士4「佐賀城の方じゃ」

志士5「政府軍がもう来よつたんか」

志士6「今こそ出撃じゃ」

志士たち「おお」

と血気盛んに飛び出していく。

新平「待て。何かおかしい。嵌められるぞ！」

新平の声は届かず、出撃する志士たち。
愕然とする新平。

○佐賀城・外観（朝）

焼け跡が残り、倒れたままの兵士たちもいる。

○同・本丸（朝）

兵に囲まれながら入城する新平。大玄関の中央に、烏帽子を被り、錦の

陣羽織を着た島義勇よしたけ（51）がどっしりと腰かけている。

傍らに「憂国党」と書かれた旗がはためいている。島「江藤か。政府軍はこの島義勇が追い払ったぞ」

新平「なぜこんなことになったのです」島「政府軍の偵察部隊が挑発してきた」

新平「それに乗ったのですか」島「とにかく戦は始まった。私は憂国党、江藤は征韓党の首領として共に戦おう」

手を差し伸べる島。新平「応じない。我々は弘道館に行きます。ご武運を」

新平「そちらが佐賀城を本営にするのなら、新平、立ち去る。気に入らなさそうに見送る島。」

○道

数千に及ぶ兵が列をなし、進軍する。

○海

軍艦が進んでいく。

○軍艦・甲板

潮風に吹かれながら、遠くを見つめている大久保。

○佐賀・最前線

政府軍が次々と大砲を放つ。吹き飛ばされる征韓党の兵士たち。

○同・征韓党陣営

新平「ここは突破されれば、この先は佐賀平野やけん、簡単に攻め入られてしまう。なんとしたとしても踏ん張れ」
香月「ばつても政府軍はどんどん応援が駆けつけよる中、こちらは弾薬も底を尽きかけています」
新平「島と落ち合う。それまで耐えてくれ」
急いで立ち去る新平。

○佐賀城・本丸

烏帽子に錦の陣羽織姿の島。
新平「もう勝機はなか。すぐに解散しましよ。う。これ以上やれば、政府軍は戦犯として小隊長以上ば皆殺しにするかもしれん」
島「解散はせん」
新平「島！人民の命ばなんて思いよつとか」
島「こいは戦ばい！最期まで戦い、そんな時はこの城ば死に場所にする」
新平「時代錯誤もいいところだ。征韓党は解散する！」
新平、立ち去る。

○弘道館・征韓党本営（夕）

志士たちの前に立つ新平。
新平「山中や香月らが新平の言葉を待つ。である。これ以上戦いを続けるのは、匹夫の勇肩を落とす志士たち。志士たち「まだ終わっておりません。死ぬまで戦うのが武士です」
新平「もう武士の世ではない。なんとしても生き延びよ」
涙を飲む志士たち。

○佐賀城・本丸（夕）

待機している島。

兵士「政府軍から、明日の正午までに降伏せ

よとのお達しが」

島「降伏はせぬ。このまま籠城し、武士らし

ゆう戦う」

幹部「降伏せぬのなら、今ここで切腹するの

がよつぽど武士らしくございます」

島「：：よし、わかった。降伏はせぬまま、

夜が明けぬうちに城から出るぞ」

○佐賀平野（朝）

田畑には砲弾のあとや、倒れた兵士。

優雅に進んでいく馬車。

それに揺られている大久保。

○佐賀城・鯨しやちの門

政府軍の兵士たちが押し入る。

○同・本丸

大久保「兵に囲まれながら、入ってくる大久保。

ほくそ笑む大久保。自害しておくはずだ」

兵士「奥から兵士が大久保のもとに来る。

大久保「賊軍は誰一人残っておりません」

大久保「何？」

大久保「何か閃いたようにニヤつく。

大久保「江藤の指名手配書を作れ」

兵士「は」

大久保「大久保、笑いを堪えるも、微かに吹き

出してしまふ。

鎮台兵「：：どうなさいました？」

大久保「指名手配制度を作った者こそ、初代

司法卿、江藤新平よ。その張本人が日本初

の指名手配犯というわけだ」

○山

猟銃を構える西郷。

狙いを定め、銃を撃つ。
倒れ込んだウサギ。
西郷、ウサギに近づき、耳をつかんで
持ち帰る。

○湯宿・湯小屋（夕）

風呂に浸かっている西郷。

女将が来る。

女将「お休みのところすみません。他国の方
が見えております。急ぎお目見えしたいと」

しかめる西郷。

西郷「そのお方、どこのもんじゃと申されて
いもした」

女将「さあ。鹿児島言葉でもなく、目が大き
くて、袴でなしに普段着で……あ、これを」

女将、窓から紙包みを差し入れる。

受け取る西郷。紙を開く。

達筆で「会ひたし」の文字。

目の色が変わる西郷。

西郷「すぐに行く。客人はそれなりの座敷に
お通ししたもせ」

女将「へえ」

風呂から上がる西郷。

○同・廊下（夜）

か細い灯火の紙燭を持ち、歩く西郷。
座敷の襖の前で立ち止まる。

襖に手をかけ、開ける。

○同・座敷（夜）

西郷が入る。

行灯だけで薄暗い座敷。

座っている新平。

西郷「江藤さん、お久しぶりでござす」
新平「西郷さん」

新平、険しい表情を浮かべている。

西郷、膝を突き合わせて座る。

西郷「で、どうされました」
新平「単刀直入に申します。佐賀が政府軍に

攻め込まれました」

西郷「私が言うようになさらんと、当てが違
いますぞ！」

言葉を探す新平。

西郷「：長旅で疲れたでしょう。すぐに寝

床ば用意させます」

西郷、立ち去る。

新平「それでも自分は、初代司法卿として、

東京で公正な裁判ば受ける。そいが、自分
の作った法治国家やけん」

西郷、襖を閉じ、出ていく。
取り残される新平。

○街道

役人が紙を配っている。

人々がそれを受け取っては見ている。
街角に張り出された指名手配書。新平
の顔写真。

「佐賀県士族 征韓党 江藤新平

一、年齢四十一歳

一、丈高く肉肥へたる方

一、ごんぜつはなは言舌太だ高き方……」

などと書かれている。

○宿・客室

船田、そわそわと落ち着かない様子。

新平が入ってくる。

船田「先生……西郷さんは？」

新平、首を横に振る。

船田「……そいで、これからどがんします？」

新平「高知に向かう」

○山

雨に濡れながら、険しい山道を歩く新
平、船田。

新平、立ち止まり、コンパスで方角を
探る。

○同・洞窟

雨を凌ぐ新平、船田。

焚き火を囲み、ぐったりと顔に疲労の色が浮かんでいる。

新平「自分は母の腹を出てから、こがん苦痛に遭ったことはなか。ようここまで付いてきてくれた」

かしこまる船田。

新平「船田。今、君の忠誠に報いきれんのが残念ばい」

船田「いえ」

新平「自分は東京で佐賀の汚名ば晴らした上、罪を得たら腹を切るつもりだ」

船田、神妙な面持ち。

新平「元々君は今回のこととは関わりがなかけん、雨が止んだら国へ帰りなさい」

新平の言葉を噛みしめている船田。

船田「私は貧しい漁師の生まれでございますが、佐賀の葉隠の心を知っております。このような時に、自分だけ去ることなんてできません」

新平「：：船田」

遠い目をして焚き火を見つめる新平。

新平「武士道と云うは死ぬ事と見付けたり、か」

揺らめく焚き火の、か細い灯火。

○甲浦坂（夜）

かんのうら

袴を着て、ステッキを持って立っている

浦正胤まさたね（30代）。たばこを吸っている。

遠くから、竹笠を被った二人組が坂を下ってくる。

浦、手配書を取り出す。新平の顔写真。

歩いていく新平、船田。

新平、竹竿を目深に被る。

浦の横を通り過ぎようとする新平と

船田。

浦、声を張り上げる。

浦「待て！」

立ち止まる新平、船田。

浦「どこへ行く」

船田「高知から浪華なむわへ向かうところである」

浦「生まれは？」

船田「浪華である」

浦「自分は番人の浦正胤と申す。この頃、賊が山中に逃げたと知らせを聞いて見張っておった」

押し黙る新平、船田。

浦「失礼ではあるが旅切手の提示を求めたい」

船田「あいにく、持ち合わせておらぬ」

浦「何？」

船田「商用で旅をしておったが、浪華を出たのがもう何か月も前であり、その時は旅切手など必要なかったもので」

浦「それでは県庁の許可があるまで、この地に留まってもらう必要がある」

船田「それでは困る――」

動揺する船田を手で制する新平。

新平「君が番人とは話が早い。密かに相談したいことがある。どこかに案内してはもらえぬか」

落ち着き、堂々としている新平。

浦「よからう」
新平を観察するようにじっと見る浦。

浦、歩いていく。

あとに続く新平、船田。

○役場・座敷

向かい合う新平と浦。

新平の後ろに船田。

新平「余は山本清と申す。岩倉右大臣の執事であり、内務省の密偵として佐賀、鹿児島、高知への出張を命じられた者である」

浦「岩倉右大臣の？」

新平「ええ。先日、岩倉卿を襲撃した暴徒を追って高知まで来ておった。急いだので身分を証明する書類は持たぬが、岩倉卿宛てに書状を書こう」

浦「承知いたしました。しかしながら、その返事に對して県庁から指示があるまでは、甲浦に留まっていただけですか？」
新平「そのつもりだ」
穩やかに応じる新平。

○同・廊下

浦「浦、部下に指示を出す。
浦「すぐに県庁の細川様を呼んでくれ。江藤部を捕えたと伝えるのだ」
部下「は」

○庄屋・寢室（夜）

船田が眠っている中、トランクの上で書状をしたためている新平。
ふと横を見ると、襖のわずかな隙間から灯りが漏れている。

○同・隣室（夜）

袴のまま、うとうとしている浦。
新平が襖を開けて入ってくると、咄嗟に身構える。
新平「書物を取り出し、浦に渡す。
新平「これも何かの縁だ」
受け取る浦。

表紙に「憲法類編」とある。

浦「これは？」

新平「外国の法を訳したものだよ。文明の中で、国や人がどうあるべきかがよくわかる」

浦「国や人のあり方、ですか」

書物をめくってみる浦。

新平「君は、ドローシビルという言葉を知っているかな？」

浦「ドローシビル？」

新平「フランス語で、民権という意味だ」

浦「民権……どういうものなのでしょうか？」

新平「国民一人一人が権利を持つということだよ。権力者だけで政治を行えば時として暴走する。これからは、国民主権の時代だ」
いまいち飲み込めていない浦。

浦「国民主権：しかし国民に、国を動かせるのでしょいか」
新平「ああ。私たち一人一人に、その意思があればね」
新平「元平、元の部屋に戻っていく。隣室に引込まむ新平。」

○同・寝室（夜）

襖を閉める新平。
襖を背に、観念したように息を吐く。

○同・隣室（早朝）

夢中で「憲法類編」を読んでいる浦。目は冴えていて、どんどんページをめくっていく。

○道（朝）

馬で駆け抜ける細川是非之助（40代）。

○役場・座敷（朝）

細川が入ってくる。
浦がいて。

浦「細川様」
細川「江藤参議なのか？」
浦「はつきりとはまだ：：ただ、これを見る限り、人違いかもしれません」

宛名に「岩倉卿」の文字。裏返すと「清拝」とあり、いずれも達筆な字。

細川「本当に執事なら、雲の上のお方に直接書状を出すのは無礼にあたるはずだ」

細川「この手紙は職権によって開封する」

細川「書状には「江藤新平」の署名。」

浦「：：「憲法類編」を手に取る浦。
：：ただ私は、あのお方が本当に国賊な

のか、甚だ疑問がございます」

細川「明治政府で司法卿の重役を務めたお方

だ。捕えるにしても、丁重に、礼を持って

しななければならぬぞ」

浦「は」
新平M「岩倉卿。私は乱を起こしました」

○庄屋・座敷

窓を開け、天を仰ぎながら煙管をふか
している新平。

新平M「その罰は法を持って謹んで償います。

ただ、こうなってしまった経緯いきほひと、うちに

秘めた志だけはどうか述べさせていただき
たい」

煙を吐く新平。

空に立ち込め、消えてしまう煙。

新平M「願わくは、東京までの道筋を開いて
くださるよう」

新平、煙管で火鉢を叩くと、雁首が外
れる。
床に落ちた雁首。

○佐賀城・本丸

碁盤の前に、一人で碁を打つ大久保。

兵士が来る。

兵士「失礼いたします。軍艦の準備が整いま
した」

大久保「そうか。繰り返すが、その軍艦は江
藤を捕え、佐賀に連れ戻すためのものではあ
る。奴を絶対に東京に送ってはならんぞ」

兵士「は」

○庄屋・座敷

新平、船田。

老僕が入ってくる。

老僕「山本様、役場に客人があり、浦様と
碁に興じられております。どうかすぐにい
らっしゃっていただけますか」

新平「承知した」不安そうに新平を見る船田。

老僕「長旅でお疲れのところありがとうございます。お立ち去る新平。一人で良か」

船田「先生、お供します」

新平「かえって怪しまれる。一人で良か」

○役場・玄関

新平が来ると、浦が迎える。

浦「山本様、よく来てくださいました。さあ、中へ」

浦、新平を招き入れる。

○同・座敷

浦と新平が入ってくる。

碁盤の前に座っている細川。要人に接するようには礼儀を持って挨拶する。

細川「県庁の細川是非之助と申します。お目にかかれて光栄に存じます」

新平「岩倉右大臣の執事、山本清にございませう」

細川「よく来てくださいました。さあ」

と碁盤の前に江藤を促す細川。

○同・隣室

御繩を持った番人たちが、襖の前で聞き耳を立てながら待機している。

細川の声「浦殿ではどうも相手にならず。ぜひ一局お願いしたいと思ひまして」

○同・外

船田がこそこそと駆けつける。

中を覗こうと、うろろうする船田。

○同・座敷

碁盤の前に新平、細川。

固唾をのんで見守る浦。

細川「お願い申し上げます」

新平「お願い申し上げます」
礼を交わし、碁石を打つ細川。
新平も打つ。
碁石を打つ音だけが響いていく。

○佐賀城・本丸

大久保が碁石を打つ。

○役場・座敷

新平が打つ。
以下、それぞれの場所です。

大久保が打つ。

新平、手を迷わせ、打つ。

大久保が、力強く一手を打つ。

小さく唸る新平。マッチで煙管に火を

つけ、吸い始める。

細川の顔に、冷や汗が伝う。

新平「細川、手が止まる。」

細川「懐に手を入れる細川。新平の指名手配書を広げ、碁盤に置く。」

細川「この人物を、ご存知でしょうか」

「眉一つ動かさない新平。割れそうなほど火鉢を煙管で叩き、吸殻を捨てる。」

新平「携えていた銀装の小刀を、碁盤に置く。」

細川「私、江藤新平です」

「江藤新平殿、お召捕り」
襖が開き、番人たちが勢いよく入ってきて、新平を取り囲む。
番人が新平に御繩をかけようとする。

浦「お待ちください」

浦「浦、番人に詰め寄る。」

浦「私が」

細川、頷く。

浦、形式的に、新平の両手を軽く縛る。

新平、神妙な面持ち。

庭先に、男たちに取り押さえられた船

田が連れてこられ、ひったてられる。

座敷を見上げる船田。

手首を縛られ、仁王立ちした新平。

船田「先生！」

優しい眼差しで船田を見つめ、微笑み

かける新平。

番人が、新平を座敷の奥に連行する。

あとに続く浦、細川。

船田「先生！先生！」

船田、必死に男たちを振り払おうとす

るが、かえって激しく押さえられる。

座敷の奥に消えていく、新平の背中。

○同・牢（夜）

月明かりに照らされて、手首を縛られ

たままじつと座っている新平。

細川の声「江藤様。失礼いたします」

細川が入る。

新平「何か用かな」

細川、新平に詰め寄り、縄を解き始め

る。

新平「細川殿？」

細川「県庁から派遣された立場ゆえ、昼間は

やむなく捕縛いたしました。しかし、ここか

らは役人ではなく、一人の人間として申し

上げます」

縄が解かれ、自由になる新平。

細川、かしこまる。

細川「どうか逃げてください。あとの責任は、

この細川が一切の責任を負いますゆえ」

細川の言葉を噛みしめるように、自分

新平「佐賀に兵士を残してきた以上、自分だ

け逃げることはできない。それに、私は法に従うまでだ」

敬服した眼差しを向ける細川。
新平の目に、後悔はない。

○宿屋・座敷（夜）

大久保が芸者とともに食事を囲み、酒をたしなんている。酒を一気に飲み干し、上機嫌な大久保。

○江戸城・岩倉の部屋

伊藤の声「岩倉様、伊藤にございます」

岩倉「入れ」

大木が入る。

岩倉「江藤が捕えられたそうじゃな」

伊藤「はい」

岩倉「大久保は佐賀城に臨時裁判所を準備し

ておる。磨たちの邪魔が入りにくい佐賀で

江藤を消すつもりかもしれぬ」

岩倉「伊藤、すぐに佐賀へ遣いを出し、大久

保に江藤を殺すなと申し伝えよ」

伊藤「承知いたしました」

○甲浦港

軍艦が入港してくる。

○役場・牢（朝）

牢の中に新平。

細川「おはようございます」

新平「ああ」

細川「甲浦港に軍艦が到着しました。これよ

り我々が先生を高知県庁までお送りし、海

軍に引き渡します」

新平「：：私一人を運ぶために軍艦まで用意

されてはいるのか」

細川「はい。海を渡って佐賀へお運びすると」

新平「佐賀に？」

細川「新平、腑に落ちない様子。」

新平「いや」

細川「牢を開ける細川。」

新平「それでは、参りましょう」

細川「それでは、参りましょう」

○同・外（朝）

新平と細川が出てくる。

新平、目の前の光景に圧倒される。

そこには賓客を運ぶ駕籠が用意され、数十人の役人が新平に頭を下げる。

ステッキを持った浦もいて。

浦「先生は、私共が嚴重に警護し、お運びい

たします」

新平「浦殿」

感慨深そうな新平。

細川「朝は十分に日が昇ってから出発し、夜

は明るいうちに宿へ入ります。普段ですと

三日で到着ですが、六日はかかるでしょう」

新平「誠に……かたじけない」

○城下町・道

新平を乗せた駕籠を運ぶ、大名行列のような一行が進んでいく。

民衆たちが道の脇から物珍しそうに注目している。

○同・駕籠の中

揺られていく新平、駕籠の窓からそつと外を窺う。

○同・道

民衆たちが、駕籠に向かって頭を下げている。

○同・駕籠の中

新平、窓を閉め、感無量の様子。

○甲浦港

軍艦が停泊している。
御繩をかけられ、乗り込んでいく新平。

○軍艦・牢

役人に導かれ、新平が牢に入れられる。

船田や山中、香月がいる。

船田・山中・香月「(口々に)先生」

船田「よくぞご無事で」

新平「お前たちこそ……」

船田「肩を寄せ合い、再会を喜ぶ新平たち。

船田「先生、私たちはこれから、どうなるの

でしようか」

新平「一旦は佐賀に送られ、そののちに東京

へ向かうことになるだろう。直接ことの次

第ば説明すれば、死罪は免れるはずだ」

不安そうな船田。

新平「なあに、岩倉さんに一筆書いとるけん、

なんとかしてくださるやろう」

山中「岩倉さんが動いてくださるなら、心強

いですね」

香月「先生、ありがとうございます」

新平「ああ。そもそも文明国なら死罪はまず

ない。あのナポレオンでも島流しやったく

らいやけん」

船田、山中、香月の顔に希望が戻って

くる。

新平「日本も、この江藤がそういう国にした

のだ。安心せい」

柔和な笑顔を向ける新平。

○佐賀城・本丸

電信を読む大久保。

大久保M「岩倉卿から佐賀に遣いあり。江藤

を殺すなどの命令を申し伝えるゆえ、面会

を拒むべし」

大久保「ほくそ笑む大久保。

「伊藤、よくやった」

○城下町

御繩をかけられたまま、馬車に揺られて
いる新平。崩れた建物の横を通り過ぎていく。
たまらず、目を瞑る新平。

○佐賀城・臨時裁判所

看守に引かれ、御繩をかけられた新平
が連れてこられる。既に山中や香月ら征韓党や、島といつ
た憂国党の幹部もいる。
地べたに引かれた粗筵あらむしろに跪く新平。
裁判官席に、河野が現れる。
頬がほころぶ新平。

新平「敏鎌とがま。お前が判事か」

河野「河野、一切の表情を見せず、仰々しく
振舞う。」

河野「口を慎みなさい」
眉をひそめる新平。

河野「初代司法卿ともあろう者が、国にたて
突くとは何事か！」

新平「敏鎌！それが恩人に対する態度か」
眼光鋭く河野を睨む新平。

おののく河野。席を離れ、逃げるよう
に引っ込んでしまう。

○同・廊下

そそくさと小走りする河野。
大久保が立ちはだかる。

大久保「何をしておる」

河野「河野、口籠る。」
河野「：：やはり、私には先生を裁くことな
どできません」

大久保「この内務卿の命めいは勅命に等しいのだ。

河野「反すればお前も国賊とみなすぞ」
「：：：どうかもう、おやめください」

大久保「お前はただ言われた通りにしていい。お前の判決を下せば、約束通り千両やろう」

縮こまる河野。
威圧感の漂う大久保。

○同・臨時裁判所

山中「警吏から無理やり書類に拇印させられようとしていて、抵抗している。

警吏「大人しくせよ」
山中「これは事実に反する」

新平「山中、ここは従いなさい」

新平「佐賀での裁判はあくまで予審だ。ここ

山中「心証を悪くすれば、東京での裁判に響く」

山中「：：承知いたしました」
山中、大人しく拇印する。
落ち着き払っている新平。

○牢

黙想している新平。
看守の足音が近づいてくる。

看守「出る」
新平、ゆっくりと目を開く。精悍な顔つき。

○佐賀城・裁判所

地べたの粗筵に跪いている新平。
裁判官席に河野が現れる。

新平「壇上に大久保も姿を現す。」

大久保「大久保、やはりお前か」
新平「なんのことですかな」

河野「判決を言い渡す」
河野「河野、書類を広げ、読み上げる。」

河野「その方、征韓党の党員を募り、武器を集めて官軍と敵対し、謀反を呈す科により、除族の上、さらし首を申しつける」

新平、目を見開く。咄嗟に立ち上がり、鬼のような剣幕で怒号する。

新平「私は――」

警吏たちが新平を取り押さえる。

激しくもがき、抵抗する新平。

大久保M「江藤の醜態、笑止なり」

○処刑場（夕）

執行人たち^たに囲まれ、入ってくる新平。
新平「最期に言い残すことはないか」

新平、穏やかな顔をしている。

新平「唯皇天后土の我が心を知るあるのみ」

その言葉を、三度声高く叫ぶ。
回想終わり。

○赤坂御所・寢室（夜）

勝ち誇ったような笑みを浮かべている大久保。

言葉^を失っている園田。

大久保「我が心は、天地の神のみぞ知る。それが、弁論の鋭さからカミソリとまで言われた男の、最期の言葉だ」

○大久保邸・玄関（朝）

馬車に乗り込む大久保。

○馬車（朝）

揺られている大久保、挙動不審で、落ち着かない。

○赤坂御門（朝）

馬車が角を曲がる。

○清水谷（朝）

馬車が走っている。

草むらに、刀を帯びた志士たちが隠れている。

馬車が近づくと志士たちが飛び出し、

立ちふさがる。

○同・馬車（朝）

立ち止まる馬車。

おののく大久保。

馭者「大久保様、お逃げください」

馭者、斬られる。

馬車の扉が開けられ、志士が飛び込ん

でくる。大久保に刀を振りかざす。

ハツとする大久保。

× × ×

大久保のイメージ。

目の前に新平。刀ではなく御縄を持つ

ている。

新平「私はい」

新平の口元が動くが、何と言っている

かは聞こえない。

遠い目をしている大久保。

大久保

「ああ、そうだな」

大久保、両手首を差し出す。

新平が、大久保に御縄をかける。

× × ×

地べたに横たわっている大久保。

転げ落ちた「憲法類編」。

それに向かって大久保の手が伸びて

いる。

大久保の血が、「憲法類編」に染み込ん

でいく。

終